

# オンラインでキックオフ!

2年ぶりにキックオフ・ミーティングを開催します。

子どもたちと密に接する「こらっせ」のプログラムはコロナ禍で中止においこまれましたが、同時にこの間「フクシマを忘れない」という結成当時のミッションを再考するチャンスになりました。カルガモ一家の物語は、私たちに「子どもたちの未来のために」何ができるかを考えさせてくれるでしょう。

2022年4月3日(日)14時~16時

原発事故から11年、  
自主避難家族の思うこと  
聞いて、カルガモ一家の物語を



お話し：カルガモ一家(鴨下さん一家)

鴨下祐也さん(お父さん 福島原発被害東京訴訟原告団長)

鴨下美和さん(お母さん ひなん生活をまもる会等の事務局メンバー)

鴨下全生さん(お兄さん 大学1年、原発問題に関して多数発信)

コーディネーター：加藤彰彦(野本三吉)さん(沖縄大学名誉教授)

参加費：無料

主催：福島子ども・こらっせ神奈川



カルガモ一家

カルガモ一家の兄弟は高専の先生をしているお父さん、お母さんと家族4人で、自然豊かな福島県いわき市に住んでいました。幼い兄弟の生活を一変させたのは、2011年3月11日、東日本大震災と原発事故。放射能汚染を逃れるために、車で親戚が住む横浜にたどり着いたのは3月13日未明。一家は東京で暮らし始めますが、お父さんは再開した学校で教えるためいわきに1人もどり、お母さんと兄弟、3人の生活になりました。全生君は転校した小学校でいじめに苦しみました。お父さんは体調をくずし、やせ細っていきます。お母さんはお父さんに懇願しました。「お金はどうでもいいから、(仕事を)辞めて」

カルガモ一家には厳しい現実がおそいかかりました。原発事故被害者の分断、汚染地域居住の危険、避難者への住宅提供の打ち切りと追い出しなどなど。一家はこの不正義を訴え続けています。2018年、16歳になった全生君はローマ教皇に手紙を書き、謁見の場では、原発事故の被害を直接訴えました。

加藤彰彦さんは「私たち市民は、国家が広島・沖縄そして福島を棄民にしたことを自分たちの問題としてとらえ、次世代を大事に育てよう」と語ります。加藤さんとカルガモ一家の対話からどんな化学反応がおきるでしょうか。

## 申込み

Web会議システム(Zoomウェビナー)により開催します。参加ご希望の方は、下記のQRコードか次のサイトよりご登録ください。入力が難しければ、事務局メールに必要事項(お名前、所属、メールアドレス、電話番号(任意：メール送付がエラーの場合に連絡します))を記入して送ってください。配信用URLは、講演会前日までに送付します。ご不明点があれば事務局メールにご連絡をお願いします。



<https://oni.la/5NPpL34>



連絡先  
福島子ども・こらっせ神奈川

✉ :info@korasse-kanagawa.org ☎ :045-353-9008

ホームページ : <http://korasse-kanagawa.org/>